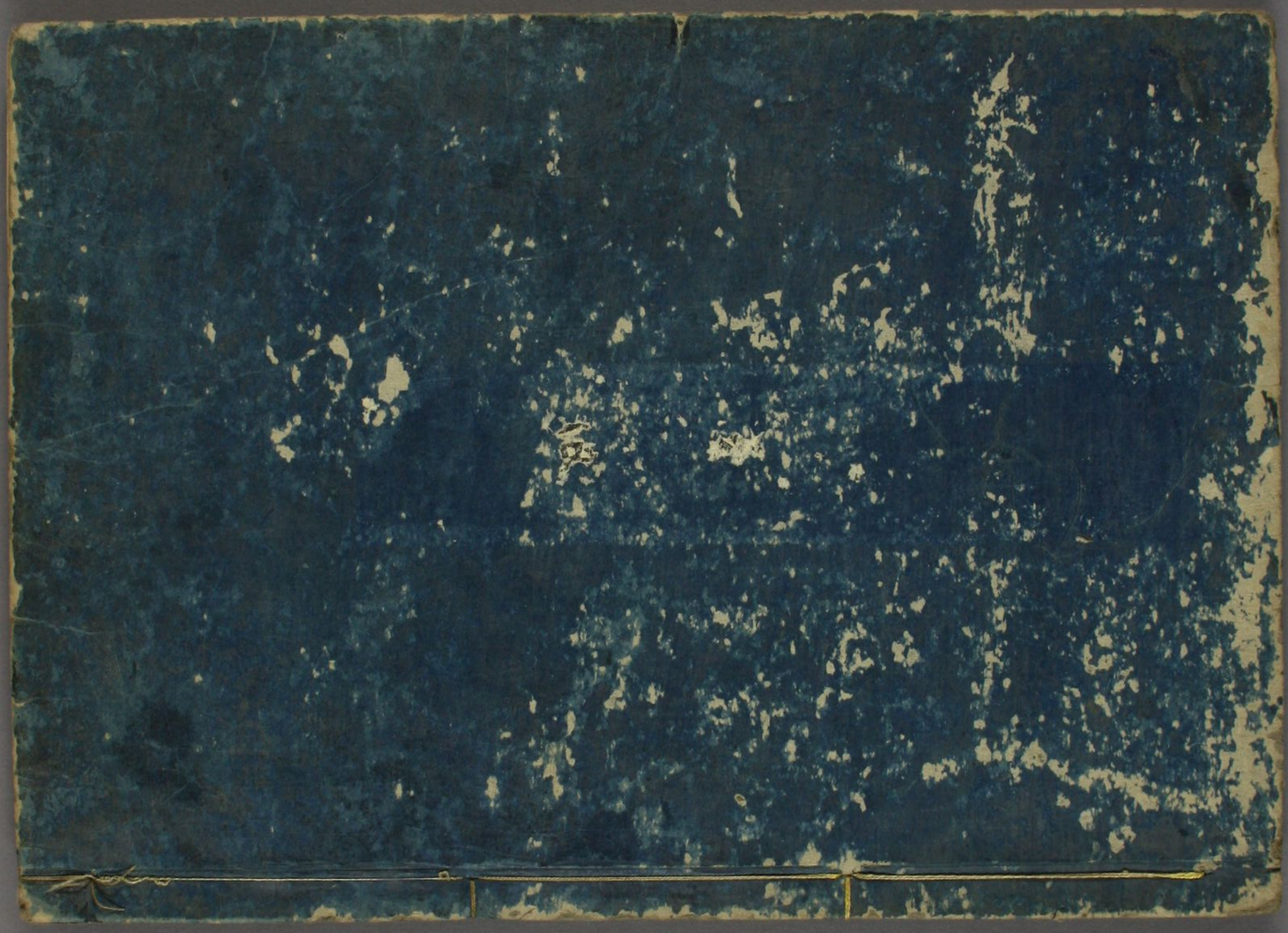

源氏物語系圖

- 大上天皇
  - 桐壺の巻より御位もく久しくましまして後
    葵巻より東宮よりさりてある女院
    桐壺のみ門より梅壺へ移奉りて崩御 霜月一日二日ゝ
  - 前坊 ゆき奥よあり
    女院のみこにてましまして葵巻よりみえたり
  - 桃薗式部卿宮
    薄雲よりみえたれど女院中務の文にてしる
  - 樣齊院 女
    梅壺へうつり賀茂のいつきよりて後薄雲巻より

江戸文庫

…のれ服…
…よ…の女…
…(グレ)…髪…源氏…

揚政小方

…
…
…
…

女五宮

…朔…院…桃…
…中納言…
…

朱雀院 母…

…源氏の…

桐壺の…
うもう 位…
…
…髪…

六條院 母桐壺更衣按察大納言女

桐壺の…
母…
…
…

冷泉院

一宮 母も后の御すくしの女御
女一宮 母こき殿女御 後は承香殿女一宮と申ス 姉
女二宮 女一宮と同母 後は弘徽殿女二宮と申ス 姉

宇治宮 母大臣女 母の中もよろしきほどなりけれど
えん宮 母后のみやうちとも

えん宮〳〵人給合の事
紀氏の女房を以四月より生給養の事
立坊を行くしの事
里をえて位よつ事
よゆりて坊をあつる也 十八年 梅姫 よ十のみ
こゝにゝり

宇治大姫君 母大臣女
うぢ殿のおとゝ
ひんがしの院
中君 母同
よもぎの大姫君
よもぎの自然々々
よもぎ人られ給うへ

宇治大姫君 母大臣女
うぢ殿のおとゝ
もり給よ京の事
よ宇治よりとり
給うへくの事
給し給よあもぎ
よもぎの大姫君
中君 母同

[illegible]
多智三君 母中納言 今も孝経守の少方
母君陸奥国守[illegible]
[illegible]
孝経守 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

一条宮 母春華院と同女一宮皇太后宮と申ス
後朱雀院 母春華院と申ス
養の君と申ス後冷泉院の御猶子ニ成給ひて
女三の宮と

夕霧 母葵の上後に改て民部卿と申ス
葵の巻に八月に生れやうく四歳にて
それ迄は祖母君の御もとに有しが
の巻より元服して大学の頭と成
その通り入く寮試と云ふ事に及ひ
又ゆりく四位少将に成り
補せられ同年の秋除目の後まうけの君
治部卿の時侍従より中将
胡蝶の巻より権大納言に転じ
の裏葉の巻より権中納言に成
をとり成次の年権大納言と有
賜すと有り中将の君と
よき男にて
薫右大将 母女三の宮ハ柏木の権大納言
若菜の巻より次の年二月
竹河の巻より
この君と二月十四日に
ゆくりと今年の秋

して宰相よりも中将ぬえ 行成卿まで中納言
つまで二月のうめ
をとめのうつくしきこと
振舞をうち思出聞ゆ
一帥の中宮 母明石の上の通ひ給ひし
卿とつぐの巻より明石の浦わくら葉に
の巻より母上は異して
給ひと源氏の巻より
巻をうち給ふ
十四ゆくゑ
法の巻より中
一左衛門督 母按内侍 宮々の
中宮の出仕をうち

中納言 ゆき二人のうちの日出仕せし一人
源宰相中将 母三條上臈仕大弐の二女
えい若人の将とうひさ
よ宰相 中将ぬえ 冷泉院のうち女御よ
侍従宰相 母
橋姫より白菊の初霜より給ひし阿闍梨より一人
一次中将 母
妹のうち君より
の役そまいりうち
一太夫弁 のうちの日出仕し一人
一権中将 母
一左中弁

行河の考よ正月より十二月の所作
らの内名乃ことくれかゝりてそろしく人

四位少将
一品式のおもなるもの
の四役廿一人

殿人六位蔵人
物取扱よつてそろしく人

侍従
行河乃ら正月より内侍のうちくれかゝりてそろしく人

表文女御 母宰相中将の母
うり中将の考よ入木

中君 母故仕大納言母

今の白文考ろ
うり中将の考よ
よ改行ます母の一源氏書をもりてます

六君 母故内侍の方
一条の文考よ
一条の文部々の文乃兄の三文れかた

今上 母承香殿女御方
明石の考よ二歳よりてそろしく乃
考よ式文よ立
葉考よ位よつて女ます

女一宮 母下臈
若葉考よ敬文

落葉宮 母下臈の表

院西山のかたはらに
未確定の部分のため
のこれる部分
一条院の皇后
春日局
一品内親王 母は帝の源氏女蘭子の女
西山なる
源院
海りくわひの日
母女房
大納言
女四宮
東宮 母は明石の中宮女六條院の
二宮 母東宮
白兵部卿宮 母は源氏女蘭子の女
若宮 母宇治女御 女中書

うつそれいろこいもりうし梅の匂いとそのゆいさ

四宮 母更衣腹

夕雪大納言もうのうしあうし一日ちうし乃
ふかき匂ひもうれ給うし人也

五宮 母朱雀院女御

うり中務の宮と匂ひもうれ日夕雪のうねりまりのき
よもうく一車うしの女うく給うし人

中務宮 母女御

やうりまよう宮れ桜の時あうとうり給うし人

常陸宮 母更衣

夕雪のうねり賭うれ日ちうし乃ふ
よりのゆうれうし人

女一宮 母朱雀院女御

紫のうよ雪のれうよ
ちうしひうしうれうし

女二宮 母藤大納言女御 落飾

やうりまの雪よりうし大納言の南乃まちに着給
その夜乃裏の日ちうしてまいあうしうり
まれいう給乃うしやんうれくちひゆうしう
を一品の宮乃うりうし人
ひ給へくをちうしうし人也

● 兵衛 兼雪也小侯よりつうし給ひ人也

秋好中宮 母六条御息所女

蓼の葉よ秋えもよ
なれ住ゆうよ
紅舎よ源氏のわう
とものこと女よ中
えよあうこせ語
秋の年よ
兵部卿宮
宰相中将 母雷秋院女
格うえの葉よ雲住給従
物思よ宰相中将
侍従
格うえの葉よ六条院
女宮 母桜木上総
ら女こせ語
乃接察大納
ねこら人
あこら旬

式部卿宮 母
えい
蔦雲女院 母右衛
衛の
衛門

源氏宮 母をばぢうの尼
第藤院 母式部卿の宮
うぢ宿院 おりまた也

源中納言 母 若君 朱藤院の中の御子乃式樂の皇
えい兵衛督 章華華ともうしたてまつり

中將

侍從

民部大輔

以上三人妹の君たちの御ありさまは附文
文の中にくわしく出むとまうし給へる人々也

兵衛督 仍イ

梅うえの事よ明ん年ま事文一まつり給りん
くくた事法めくくた事ふくくの和くくの人名給
時ニ書（カキ）しく人ぐるりい三四年兄よ
て

贅黒（ヒケクロ）大納言むひ服紫の上の姉
年比ニ和の事方めくくまをまつりこ
しく給よ大納言ろくくの事ようひそめくくの
世の中をこ御くくく兄弟ニ様ニ事の
心ぐくくまつり給こつさ和のまりちまつりし
和ねてもちべ世ニ川めくこうまるまやこる
の頃ニけこうこしくまつりいこまれ給ひり
ぎこころ

冷泉院女御　母ハ
乙女ようくまつり給ニ母
紫上　母ハ按察大納言ノ女
母ようくこれ給ニまれこでよやこれて
十こりみくく小山よりくと六条院源氏の
中ねこ母ニ時こいやこまつひ給した
まりよの山里ニ住みくその人給営のゆり
まひようくる文のひろまつさ給んにのくまひ
たこうぐのこうニ源二条院よりむくくより
て紫十地ニて年くくあるの事にやま
ひまりこの成ニくお法よと母給ニ六条院雲
これこ給ままひ出ニまりてこおまつ

の出申よりそれ〳〵ろくにんこゝにあつまりて
まいりたるなり

● 按政大臣政大臣 以上六人の中〳〵もとより
相撲の事よりおこりて源氏のうちより七人こ
とをばうしなひて六人の事より政大臣の
いちの人也、爲憲の中納言
御ちうと々参りたるなり

致仕太政大臣 母を上天皇下臣の次 源氏と中〳〵よろし 人〳〵
相撲の事より義人九拾番まで左中将繁
の実乃事より三四位下 小実の 乗賞 葵乃事より三位中
将も負乃事より宰相の中将とうとう
ほくの事より権中納言源氏のうちより
の事より権中納言源氏のうちより権大納言や

そくまで右大将と負たり 女より内大臣 小実の 源氏の
中〳〵世の中乃事をゆうり給 内侍 藤乃裏葉
より太政大臣若葉上の事より
終り世給より 段位表をなりてこゝ
こゝくと按拍子二条の
院乃つくりもの
左中弁 藤大納言 まいりくるやうなり
源大納言 女房乃出てきてよりもの
権中納言 女 つゝまるゝ
以上二人源氏三源氏の
日ちごの中〳〵川つまり
まいりたるなり

葵上 母ちごの中〳〵より

相壷申よ源氏よあひて葵の巻よ夕霧の左衛門督と
うち行ちくうれ給八月十余日源氏十二元服要ノ
上十六ち合給

柏木権大納言 母二条ノ院ノ女房君 光りうの中将人
ノ女のおとゝよりたゝ中将胡蝶ノ巻よ中将ノ
太よ次中将ノ巻ノ巻よ泰(サンギ)議ノ巻ノ巻ノ同巻ノ
中納言(カミ)巻ノ巻ノ二条ノ院乃ひかぐれて病ノ
ぐりうちうちに柏木ノ巻ノ巻よ病ノうちに取ノ
ノ大納言よなりて給ひくノ巻ノ巻ノ巻ノ巻ノ
とつひさ

紅梅大納言 母落葉ノ宮

柳ノ壷ゆくく殿よゆうちう秋ノ巻ノ巻ノ巻ノ巻ノ

頭中将

蘭(ケイデン)殿女御 母右ノ大将ノ女

紅梅ノ巻よ母ノ北方ノ腹

殿ノ女御よゆ

中ノ君 母女御よゆ

紅梅ノ巻よ母ノ北方ノ腹

紅梅ノ北ノ方

大輔(たゆう) 母按察大納言ノ女

紅梅ノ巻よ按察大納言ノ北方ノ腹

弘徽殿女御（コキデンノ）　母を馬寮よ十二てめく門よまつり給ふ
　　御とづくしの巻
　院ゝ女一ノ宮乃ゝ母ゝ縁合よ給ひ河右ゝ
久壽大納言　母按察大納言の御方
　　雲の上くもよ物いく給ふそれとりわけんいと
　　ゝしきまうのや雲井の雁も我ごとやとすき
　　ゝんや　巻裏ぬ巻の巻よゝで宰相中将や
　　ゝく〳〵時文右ゝ
右大弁宰相　母
藤宰相　母

　　ゝ二人久壽ゝ
　　ゝ分三ゝ歌ゝ
右大弁
　　柳葉桂大納言ゝ
　　ゝ
中将
蔵人少将　巻裏巻よ分ゝ
　　ゝ付お奥〳〵人ゝ
　　ゝ二人久壽の
　　の名一條文
　　のゝれ役ゝ
　　ゝ人也

四みくめのとれお貳よう〳〵て旅業へ〳〵ろ〳〵年へて
のちむこ〳〵の事ろり家へのりう源氏乃六条
つねう給へ六条院よりはゝ様の間伯
のことへ〳〵ろり接待よ賛美のち給よみへ〳〵
時ひ〳〵ろり給事よひごの風乃たへみのとんうへ
のへ也

ハカトコヲ　十八カリノ

花の裏知ふよせらよりり

色紙君

母これもも〳〵へ〳〵ろ〳〵ろりでろ〳〵とろ給むへ
ろり給へ女御よの内方よりろ〳〵事を

くんろ〳〵へ〳〵ろりし
ろ〳〵め給ととへみ給
ろ〳〵よへ〳〵のやへ〳〵ろひつをろり給へ
ふへろへてや せらよへ〳〵へ〳〵ろ〳〵へ
あへごへ〳〵ろやへ〳〵あへのへ〳〵ろ〳〵へ
へ〳〵へ〳〵ろ〳〵書へ〳〵ろ

● 二條大政大臣

朱雀院のへ〳〵ろ〳〵の山地ろりでろ〳〵へ〳〵ろ
へ〳〵ろ〳〵へ〳〵ろ〳〵へ〳〵ろ〳〵

頭弁 母

女院のこれさせ給ふべくは源氏のたねせ世の中もそこはく
くやおぼされきこえ給ふ女院よ二三日こもりてゐ
給のちこそ人まいりつどひ給へ白妙(シラタヘ)に
きりと領(ズ)せ人まいりつどひ給へり

藤宰相殿女御 母

朱雀院の行幸の時の女御次弟の子

左中弁 母

四位少将 母

ここに人源氏中将ばかり月夜のけのこるらし妓
の好ましきてふの陣よ人とつまそて

花人の少将

ちくさぐの花の宴あまた給しに源氏のかむ人は
まいりこむしるべなくいと物せうそこ
つかうまつり人こ(夫流の)ゑをしてそ
いつまで侍る守のむ(ハベラム)ものし(ハベラ)ぬめの男し(ハベラ)
弘徽殿太后(ノ)朱雀院れ母

黄の帝よ后よこうつくしうまうけ給へり
日本よりも先源氏とも侍をして侍へり

帥宮小方

四君

致仕大臣の女房栢木の局三人冊し

弘徽殿女御のいうと

朧月夜内侍 冊

南殿の花の宴より注まてく御酔(ヱヒ)の後源氏中将

酔の酒ぞれよ弘徽殿のわりて殿よりそこそこの人

ろよう三乃ちわさとよりはわりの月夜より仏ふ

抱でもさとてのあこくろくんとをわりのをもうしぬ

妻とそで四ふとてうさいでさてうさひわり

弘徽殿のまいあつぎとよりうへてゆき別

きのよふのあとやそいひし人

也養のさよ来雀院よまつりてうえうし殿と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もと今上の御母儀也

兼雷殿女御

今上の御母承香殿の女御也

次中将 母

六條源氏大納言

きみ男しくひかまりて内裏のつぼねあくやをつくろひてぞ給はりける

北泉院女御

北泉院位の御時の女御、権中納言の一女

藤中納言 母北泉院女御の一女

竹河の巻門よりそとの内侍のもとへ

いり人

右兵衛督 母むこ

ある折よりけるこのもとにぐるまを寄

そぐこの人えい中納言竹川より右兵衛督

右大弁 母同

なをしみうらけるこれ人えい右中弁竹川より右

大弁なり

次中将 母同

えい右従竹川より次中将なり

真木柱上 母中納言高

若菜巻より巻の名人々のよるよる文をやりて

のち紅梅大納言の按察大納言と申しける時
うまひとめ給てしかの
の内侍のつぼねよりひとめ給しにおくの方よ
具して奉りける
梅花折給へるを手
折給へれをうらめしく
次泉院女御 母ろくの
竹川乃きよ院へまいりまみ二文女二ての
江母多参の大臣乃
そうしに仏つくもうく人も
内侍のつぼね 母日
竹の
のうちにおうやうてまいりまみ二文女二ての
江母多参の大臣乃
竹川の君よ母の内侍乃つぼねとそて同院
のうちにおうやうて内へまいり給竹川よ中君とあり

大弐
藤壷女御
今上帝文の江時
女御よをとよ
母ろくれをり女二てをうく
やうにまよう
大弐
治理大夫
ひと二人女御
大弐
入道殿ノ守
の一服よあらん

えハ近衛中将なりしをとりて儀広卿
よなりし程をそく移へ給のかくん事ハ
ゆかしくきれなかの心よりとうらやみて
てうらやみて明石の浦よ年ハをとされ
よきり源氏ハ須磨の浦よりこゝ移
のつまよりもろともよみつゞけ
むをめのといひいでゝぬ事ハ
生れ給しをとりて此世よのうき思ひすて
うの浦をさりて移ろひぬるの入
道とハ家をさりしのむさこ

明石上 母ハ中務宮のむすめ源氏ハ須磨の浦よりこゝまのひしを大堰

源氏の浦よりこゝ移ろひぬるの入道
へのりて舟出せしをもとりてこゝまのひしを大堰
ろうてその時の事ハ

按察大納言

源氏の母うこれ物りし大堰の浦をもれてか
のゆづとハり

桐壺の衣 ハ皇所の衣冠事也 ハ別

右流位の時の衣冠ハ源氏乃ち衣冠ハ
五ゝ三年とハ秋ハ病ありくなり
てうろめく門をハ出ず一切蟄居ハ
とゆりうぶせ給ふ事ハ須山へとう移ハ位
まるそうふる事有ふこのれ中ハ

対ひさぎ給ひ手 唐橋(からはし)の君(きみ)妃(ひ)のおもり女(め)
源氏雲林院(うんりんいん)に籠(こも)り給ひ経(きやう)読(よ)ませ給ふ
一人源氏の四位少将と

大君(おほきみ)

大原御息所(おはらのみやすどころ)

十六夜(いざよひ)の月(つき)花(はな)よりもあはれ深(ふか)き折(をり)から
十九夜(いさよひ)の月(つき)かすかなるほどに琴(こと)琵琶(びわ)など
の弾(ひ)き合(あ)せ給(たま)ふ程(ほど)いとゞ艶(えん)なり
よき程(ほど)に引(ひ)き入(い)り給(たま)ふ
世(よ)の常(つね)ならぬ御(おん)ありさまを見(み)奉(たてまつ)りて
まそう女房(にようばう)始(はじめ)源氏(げんじ)の君(きみ)に仕(つかまつ)る人々(ひとびと)

ありつゝそうろう
そんそうろう

大君(おほきみ)

宇治(うぢ)の姫君(ひめぎみ)

宇治(うぢ)の女房(にようばう)
宇治(うぢ)の女(むすめ)二人(ふたり)のそくおもり女(め)
うへひとりしようそく(君ノ)女(むすめ)をとゝもとせ給(たま)ふ

又(また)

紀伊守(きいのかみ)
小野(をの)の尼君(あまぎみ)の孫(まご)

常陸守(ひたちのかみ)少将(せうしやう)

宇治の父、此方のめに、昔いかねの君とてさうひしが、此方へ後ゆく文うちやりなどするを、あやしと思ひて、男の無きをやりて、文のかきやりてえもれうち聞よこして、かくてやまんうらめしかりけり

九中弁

宇治此方、母うへの御ともにまゐりたるに、雅平の君よ宇治の姫君うちやりて、此方の母うへのもとにかくなんなどいひやりたり

弁尼

母君、此君の御許のめのと、女房のかたとひとしく脱せかりうちやりて、昔の事ひきうせうるよ、人し、宇治の姫君うせたまふ後、さるひうちやりたりけり

右近

● 右近の御許 脱中納言とぞ

空蝉尼

うちの中納言うせたまふ後、伊予の守にて、後に常陸へくだりしが、昔のことなどおもひ出でて、

寺よりおくりこしたるひとりもとの雲
のまろよ京へ帰のかり同車してよみける
く侍まつみの海の河の身 有ノ紀行等ニ出
をいとひくろきのころ
入くる法院よりとて着かのるみつもの
のんみやこまでくるかりくる山ざとのる
こりるまでくいうそうりみみうら風ー
をこのとをおぬうらいやをくらもあーさ
もも

● 雲濃文

――菩生女君 ものとといまとつく仮名
菩をよむ
未稿元のまことよ源氏よりあ菩生君参り

東院よりとうり鼻元ろくしくみよろめて、
きんし未稿元とも

禅師

源氏物語の御よりの物語くいまて菩生君参
給いよりこさるよの八講よまりてみさ
よりうの女君乃りまくまりて源氏の君を
さはうこうしんとうもこのまてこうら
人ぐよもこのまてこうよろこそて未よ元とも仮

● 古今作ー

このよ花梅うえよ

砥屋京殿女御

梅うえよ京へ人ーまりうもも

● 梅宗大納言 久雪

梅のこ際のこのまて

五位君
乙女をよめる
まりくさみつ

春藤原惟光 母大弐乳母
えいちまと（モト）いひさし浦の女をよめる
律のくみてたまくらまくらまくら

比太政のおとゞまでつかうまつりたまふ
とかねの金鼓たゝきくやうじ
一人
冬河守壽母白
大炊尉やすし内豎もちさ

參議文周
明石乳母 女院宣旨
らくの宰相はるくるまうしんく女ゐうせて
後ろみくありへをうぐらうるこうあり
てんのみとうこうりろくを源氏こうつをる
く明石のサンの御のけうこうひろうてうの浦

へうこう給ふとぢくしーよこーてのり

三位中將

夕影上 母
致仕大臣以中ねとうの
女四位のうへをうり。夜の和ごろうす
せんこぐこうにてこうり。後よ夕鳥野前
みくる源氏中ねよりの院よりもひ
てゐようこれくゆゑ。年十九也

宰相 夕霧のこのかみ

宰相君

● 太宰大貳

源氏なりの御子ゝ孫ゝの内なりしが女房に系
院うまれ給しは人ゝくの名まへなどゝ
出されし人ゝ

義前守

昔源氏のおほくうまれ給しは義家ぬしの
うまれ給ひしのち也
人ゝ

五位尉

昔源氏のあひ給しは一人也ゝ人の人数よりて
ふへうまれ給ひしは一人也ゝ人の人数よりて
ふへ

● 前幡ノ守

若紫よう幡ノ守のこと

源義清

若紫の巻よう義清ぬしの事ゝ初ゝ頃ゝの
巻ゝ源少納言入道信西の子ゝ母は高階
経敏の女ゝ初ゝ名は通憲ゝ法名は円位ゝ
ゝ源氏むつまじくめつらしくおもひて義清帰京
とゝいふまでゝ
巻ゝ頃ゝ源氏ゝ人ゝ出家ゝ
の巻ゝいやしの須ふ山ゝ明石の入道の

しるしめの事物語ノ

五節君

女蔵よりうめいづる

仕をつべく作でしありしき

伊予守

女院うれさせ給ふく後言葉よめくくうく室

屋よのかう。日吾ようせぬ。空腹の君めやこと

紀伊守

源氏中将中将のおもかたへのまあうこ寝室

のまよりの内守よりうかう。納戸ととくまくにほん

義人おとゝ監

源氏のおもさい院のおはせまうまうの給ー

時一条ゟうしー人也。大将ゟの簡へおと

むさ給し時ゟうぐひすりて厨子の扎を

はうう。ゆくゝせ給ふく舟とぼくーよ義

人ゆをいのぜうせそそくうう。松風ようよ

つを給ふ

義人が将妻 西の北方とうろせこの巻よゟ

空腹の君よいまくむとめ紀伊守がひとり服の

妹源氏空腹のとめはしめの義人へうがいよ一歩金

給し人也を後朝のおとづれいまの

のうこととうれしくおおたの義人が名

乃めよゟ

● 当陸奥

えいみちの国うち八当陸奥よたうぶ
の志のくにうち中ねの志と申すし人の男へ

義人式部丞

その書のうちに志の国の住役めて白
当ふ文へまいりうし人へ

義人太左衛門

母主の志より同志大ねの者ゆりよ共
しまいてよしと義人へよろう

童

母同しまうねうとうびやうつひくる
の志小共にもむうしまいてくれ文づ

ひせう人

讃岐茶同書

深少納言書

此二人今の小乃方の脇よあるへ

少将小方　母主当よ共よし

ひむこのか将い者のうねのまといつてうえいふ座
の志よあつせんとして当陸守よいまくむ
もめとうして当るしくへつぐらうきんと
いひまれいちくりまびくしはひとめよろせう
り

中宮大夫

明石中宮の大夫ゆりよ共

● 太宰少貳　むうとの君の乳母の事

姫君四ツ斗ニ成給ふ時母うせ給ひて
てのみならんとせしをむうとの君
うせぬるうへはかの姫君十ばかりに
なれ給ふまゝにさうしみどころ
まさるべきさまなれば

岩淺水　太郎也

ちうせう淺井へくゆきごんとぢまで姫君
うてのやうに姫君六條院へまゐり給ふのち
をば方ばかりまん不さうぎめをとれば家司よりも

もうてやもとさう行
前の兵藤太也

次郎

三郎

此さうしよりはじめまでもてあそびつゝ
よそれいの兄のかんのくてぞまり
ましける服後國のお吏監よもとられて姫君
のまたなうこんとうまへ
姉姫もと
もれもつくしよもとうまへ

兵部卿君

れん 昔のわてうとひさ姉君よりく
のもり

● 兵部大輔

「大輔 令下婦 ふうんこうそう 母方の乳母
門の女房つくく父このひうぐく法式のはをば
つ〻のかりみていをうらぐくやく
をうるうさすぐよるびの給されれ
みてつひるうり給ぞうのうこうり
ううくて雪陰のえ乃姉君よむつひまうう
のえ乃まえうつくさ

● 按察大納言

「女 女小山御前妹尼若紫尼よえうり
紫上女早世せり人うう
紫の上乃女うくの大納言よ十めくちよなうとく
うつさ給りかぐよ
給りうい左衛門尼をうあうい給り祖
よ左衛門尼父母びくうい給りをのりとれ
小の方やうくび思つれまうまやうら

● 大弐

「式部卿宮敦実親王 おほいとの
「源氏物語 女御 おほいとの
「源氏物語 元数里上

不入系圖人々

中務宮

上野宮

梅枝右大臣

竹河右大臣

右大将

右大将

久秀大将幸相中将とゆふし時むすめの姫君よりさとうし人梅ゑよそふる

夏の御方中納言と申し時女二宮の御事申給ふ

玄宗皇帝の時楊貴妃の御事なんとせうよう明石の姫君まうけ給へりさよふてやひくぐまうし一人

久秀の御むすめ乃日源氏青海波舞給しよ出給ふ

お柴の舟乃日源氏青海波舞給しよ出給ふ

若葉の巻よりくぐにさうし人

一人

大納言
右一 右衛督
大納言
中宮大夫
右衛門督
参議修理大夫
兵衛督

まろみつ より朱雀院の勅別當
宇治の網代の時のまうけ
白き物々初雪より
四位 まろうして宇治の山中
それを宇治へ
不審
以二人紀梁かな
それをとうし
敦文 女御入内を行ふ 一人
源氏拝官の
将とのゝ 一人

民部卿
太宰大弐
左中弁
右大弁
蔵人弁
右中将

夕雪の
と所よし
え 受領
朱雀院の女二
云衆院 院の
相愛 源氏の
一人年へ 桜の
人 一人
うまつり
夕雪の
せ 人
桜の
そよそ
回 車
夕雪の せ 一人 松風の

源中將　一品宮の御家司の名よりはじめあひしる人

源理大夫　源内府はじめあひしる人

常陸介賀中將　前の右衛門督よりはじめ少將ゆき聲ばかり
はじめ常陸介の妻の名よりはじめ中納言まであり

右近中將　維盛よりはじめ權亮まであり

中納言亮　女二宮の御方ざまより申文せし人

左馬助　右近將監より申文せし人

馬頭　主上天皇の御乳母の御領の御使

式部大輔　文章博士　此人二人名字はじめ申文よりはじめ人名

大内記　名字の中ぐらの申文

民部大輔　名字の中ぐらの申文の末よりはじめ田ぐらの
ぬしまで

蔵人式部丞　名字の中ぐらの人

蔵人治部丞　院領の御領の御使

民部丞　野ぐらの名字の中ぐらの人

馬助　源氏の家人なり

筑前守　大補命婦うまちくた鳥の乳母がやくこと
和泉前守　おりく局衣の内侍乃女房中納言の君が女うとあり
右近衛　葉乃上よりくだりし人
右近衛　女房ふたりの家人小野へ出でまかりし人
右大臣殿　接察大納言　式乃君　玄象園人よりの上
大蔵大輔　葉乃君の家人名みより出文の一人有文の
紀伊守　花もちるの歌人のひとりの君が女うし人乃

時方　有文の家人文もよせし人
因幡守　おもしろの人ばかりぜひ一家乃
大夫監　筑紫より肥後国の人むこどり乃君
小山備前　小山の石ぜ見送のとり母のやう
横川僧都　前雲の女院乃くだりこの時ぜ・女院御お家乃日
小野僧都　小野のやうぜ出でこそひの君乃ことをとり
護持僧ども　一人横川の僧都
北泉院の加持僧人まち乃君の事ときく
たうとき人法務僧都とあり

宇治律師
水山上人
御導師
妙法寺別當
一條法皇所
夕臭姉君
桐壺内侍

宇治法師
指姉よりさうと結婚せる律師
源氏中將のようにやさしいのうやそ一人
幼のときより六條院の仏名の導師
もろこしやうの人ちごのやうこの人よりあえてうつくしきもの
文衣ぐしの皇女也 不審 朱雀院位の内乃 不審 女御歟
三代の内ようてうの人女房のやうな一人
三位中將女夕臭姉君よ俄よそ一十九

平内侍　侍從内侍

六條院の内侍の内侍のようこ二人給合の時揚巻の内芳よりて一人
源内侍

女院女別當
大弐典侍歟
大江

女院宣旨

御匣殿

宣旨宣旨

今上宣旨乃時の宣旨内侍のようなり
朝臣乃女の内侍のようにして源氏よび内侍所の事乃給合のときに殿の内芳
女院宣旨

御匣殿令姉

朝臣乃衣うかさねし一人

弁内侍　　絵合の時右方の（本ノマヽ）ひとり

五節典侍　　藤壺の女房源氏の北の方ひとり

中将命婦　　兵衛命婦　三人絵合の時ここの方人

右近命婦　　絵合の時梅壺の北の方北の対の方ひとり

掃部寮女官　　明石入道が叔母（不審）

東屋君　　宇治の中将の君といふ書陵部の書

小宰相君　　薫大将四人呪ひ奉りし女房

梭寮君　　同明石のつぼ（ぶ）女房

弁君　　同文女房

中納言君　　薫上の女房源氏歿ありて後の別当時よりひとり

中務君　　同女房源氏ひとり

中将君　　同女房源氏ひとり

小侍従　　同女房六条の君もなかの君の乳母の暁ともにたらひやく

中将君　　六条院女房

宰相
少將君　　朋友中文の出めのこと文男の女
太近　　夕顔の女房女君うせて後源氏の出方よりき
少納言君　　紫上のおめ姉妹のきよ物ひきよ給ふ一人
宰相君　　夕霧の大君乃めの君ふ給ふ源氏よりあつ女君
院の出河乃ときんし殿
中務君　　二条院よりし後よ紫上れ出方よりてゐ一人
弁君　　第上の女房少納言ガ女三日のよれもらる推考ガ
中將君　　まうでとうつぎ一人
　　紫の上の女房くう女君ふく居つぎの年廿四日
　　まうの日ひろ物ときうるのくぎやう
　　文とうつぎ一人

少將君　　未摘の女房紅ガ花ガ
侍従　　尼
少將君　　朋友中文の出めの里より姫君むすめらまでは
　　てゐ車よりうつぎ一人
侍従　　ようつものの別とおしむうぎ一人
　　女三女房めのこと
侍従君　　宇治文乃女房
宰相君　　ものぎうのきる乃中方の女房
大夫君　　紅君の文とうつぎ一人

中納言君　北の方　近江君の妹二人

弁君　むこどの　の女房

小侍従　二条の女房　按察のおもとの乳母

木工君　ゐなのの女房　りの方法

中将君　同

按察君　二条の女房　源氏四人

小少将君　一条の女房　人々　二人

右近君　同女房

中納言君　紫上の女房　二人

大弐君　同まけどの　の女房

中将君　同女房　二人

按察君　二人

大弐君　宇治の中君の女房　二人

右近君　同女房　大納言君　同女房　少将君　同女房　右近　うこんの女房　侍従　弁御許（ワタノモト）　中将君　同女房

右近君　うこんの女房　左兵衛督　侍従　弁御許（ワタノモト）　中将君

同女房　大納言君　同女房　少将君　同女房　右近　うこんの女房　侍従　弁御許（ワタノモト）　中将君　同女房

あてき

宰相君

芦湯番汲家君

小野大君

大弐小方

明石君

小弐妻

蓑のことのうくそめもてなして汲みてまゐる

中将君よりの使ひ人横川の僧都がのもとへとその

まうのぼりてこと

源氏并に明石の母

末摘の君の母君の妹北の方

人並々ならぬ御ありさまにて

うるの中務の宮の北の方

なりまして北の御方

みうるうるの君乃めのと

大武乳母　源氏の四めのむすめ雅元女房
右衛乳母　同四めのむすめ統帝寺づめよりてらづ大納言女
大武乳母　三條の上四めのむすめよりてらづ大納言女
宰相乳母　夕ぎりのもとぐ乃めのと
こもき　をの尼乃もとぐ乃女房
侍従　同

五名人

一人　五衣の物語より馬次の物ゝひきうしろ人
一人　同巻物語より狛ゝかうし物ゝのひもとめのごとく物ゝ
同物語より武松がかうし物ゝのひもとめのごとく物ゝ
一人　ぐしぐしうしろ人
一人　六条ゝうしの内ゝびあうさの暁こゝろあり
ゝ乃里へ中川のゝうみそえ
一人　源氏の花ちるさとやしへ時もし雅光しておもせ給ふ
一人　夕ぎり末の巻乃あよ雲ゐ乃ゝれうぐ八巻のごとく給ふ人

三人
一人
一人
一人
一人

胡蝶乃孝子の化したるもの也と二帖の註あるにより
孝子の出ぬ
ものゝ如くなれどもさうではない
宇治の中の女房早蕨よ等々まだ〳〵多い
車よせよ大盤の赤うるしの
一帖文出ぬ
やどりぎよ一帖文出ぬ
東屋孝よ宇陳守女たちかゝよ蝶ちう人

巻之次第

一 桐壺 源氏誕生至十二箇
十三四ノ箇又ハ
二 箒木 十六箇又
三 若紫 自十七箇三月
至冬
四 紅葉賀 十七十八十月
五 葵 自九一至九二箇九箇
不足紫上十四ノ二年ヨリ
六 賢木 同又
七 榊
八 花散里 九四又
九 須磨 九五九六
十 明石 九六三月九七
改京七月
十一 澪標 九七九八
十二 蓬生 十七八又
関屋 九八九月
九九又ヨリ

十二 絲合 冰
十三 松風 同
十面 落雲 九 九一
十四 女 九二 九四
十六 乙女 九六 二月
初音 九六 二月
十七 玉簪 九八 又
螢 同 又
胡蝶 同 三四月
舞人 同 秋
帝女 同 六月
行幸 九六 十二月 九七 二月
同 八月
野分 同 八月
十八 榊 九九 二月
榊枝 九九 二月
藤袴 九七 八 九月
十九 藤裏葉 九九 二月 十月

北 若菜上 九九 四十二
北一 柏木 四十八
鈴虫 又十
北四 御法 又十一 自去 至秋
北六 雲隠
紅梅 卷十九
宇治十帖
一 橋姫
二 椎本
三 總角
四 早蕨
同下 四十三月四十六七 四十二ヨリ四十又 至八不又
北三 夕霧 又十八月冬、 又十二月 至十二月 卷元服十四 至十九果 卷十四又 至十九果
北七 竹河

六 宿木
七 浮舟
九 手習

清少納言作加巻ノ名

橘人 菜守 八橋
苅萱 源氏野の上下

古物語名

伊勢 竹取 うつほ
三位 隠蓑 岩屋

六 東屋
八 蜻蛉
十 夢浮橋

さゝ

後衣 作者大弐三位 紫式部女也

ゆもく本

伍右 濱松 こま乃

ゆもく本の少将物語 清松ものよ

藐姑射（ハコヤ）

源氏数本事

行成ノ 自筆 唐守

泳克ノ 八本ゝ校合本ゝ 大和 左京滋春作或ハ花山院製作ゝ

今世不傳

冷泉中納言朝隆本

姉川右大弁俊房本 号黄表紙

従一位藤ノ本 南家相傳 右衛門左大弁女号東松小政和

法性寺関白本　唐紙小巻ミ
　　号尚侍殿本
又條三位後成卿本
京極中納言定家卿本　号青表紙
一源氏ハ寛弘始一條院出代ゟ出現して世ゟ知ゟ
　ま康和の末堀川院御代也
一水原抄　大監物光行作也
一紫式部ハ鷹司殿宮女也お継て上東門院ゟ招作ゟ
一式部墓所ハ左雲林院白毫寺南也
一式部極那院贈僧正ゟ許可ゟえて天台一心三観の血

脈ゟ受ゟ

一河海ハ善成云ハ冊波氏忠卿朝臣ゟ作ゟ里
一紫明抄十巻　親行作　光行子
　　親行法名孝舜
村上皇女
大斎院　選ゟ
安子　母九条右丞相女
上東門院　八十七歳
　法名清浄覚
仁和一
寛平九
宇多天皇
醍醐天皇　昌泰三　延喜十二
　延長八
三条朱雀也号後院
朱雀院　兼平七　天慶九
村上天皇　天暦十　天徳四　応和三　康保七

後一条後朱雀
三代國母

冷泉院　安和二

此一冊依桂宰相室而望以家中加書寫者也

天文十九季六月日　　桃華宗央判

同七月一校合

愚案此系圖之人名及註之小書等不審之事不少也蓋以河内本青表紙等之本有差異之故乎且又展轉書寫之誤手雖然今任而持之一本而強不加私勘考者也追而以正本可改矣